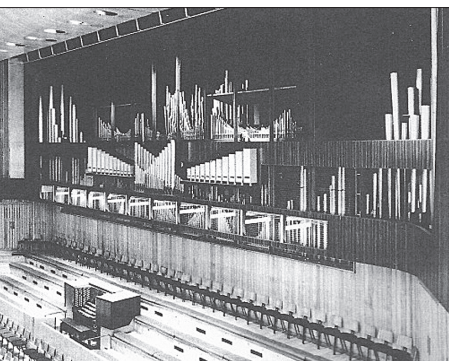




ロイヤル・フェスティバル・ホール（イギリス、ハリソン&ハリソン社製）
©「ニューグローヴ世界音楽大事典」（講談社、1993年）

特集

オルガンことはじめ

早坂牧子

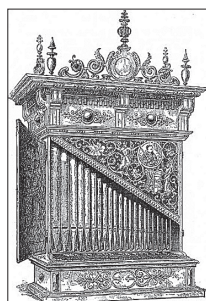
9月の読響公演では、オルガンと管弦楽の共演による作品、オルガン曲の管弦楽編曲、優れたオルガニストとして知られた作曲家の作品など、オルガンと関わりの深い演目がいくつか取り上げられる。そこで今回の特集では、オルガンに焦点を当て、その起源からコンサートホールで活用されるようになるまでの歴史をざっと眺めてみることにしよう。

オルガンという楽器

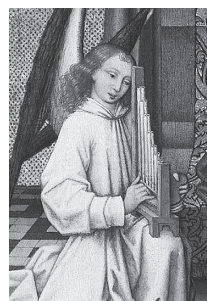
「オルガン」と聞いて、どんな楽器を思い浮かべるだろう。大聖堂に堂々と建つパイプオルガン、ジャズの演奏で聴くエレクトロニックオルガン、あるいはかつて小学校でよく見た、ペダルをこいで弾くリードオルガンを連想することもあるかもしれない。しかし、西洋諸国で「オルガン」といえば、まずパイプオルガンを指す。鍵盤、パイプの列、風をためておく風箱、風を送る送風機を備え、鍵を押すと空気弁が開いて、送風機から圧力の加わった空気がパイプに送られ音が出る。このような構造の楽器を「オルガン」と呼び、電子音を出すエレクトロニックオルガン、リードを鳴らすリードオルガンなど、パイプによらない発音の仕組み

を持つ類似の楽器と区別している。

オルガンと一口に言っても、その姿や仕様は千差万別。数千のパイプ、数十のストップ（音の種類を選ぶ装置）、複数の手鍵盤、大型の足鍵盤を持ち、建物の一部として設計される大オルガンから、鍵盤は一段のみで、移動可能なポジティブオルガン、膝上に抱えられるほど小さなポルタティブオルガンまで、大小さま



ポジティブオルガン

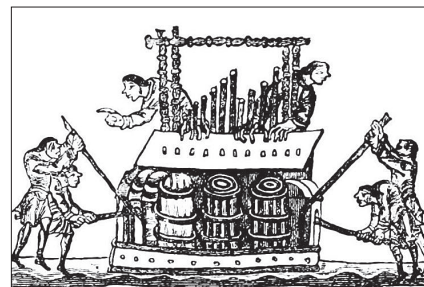


ポルタティブオルガン

ざまのものがあ、国、時代、制作者によって、音色、音量、演奏台の仕組みに多くの違いがある。そのためオルガニストは、あのオルガンにある音がこのオルガンにはないとか、あのオルガンとこのオルガンでは鍵盤の形や幅が違うとかいった勝手の違いと格闘しつつ、目の前にあるこのオルガンの魅力を存分に引き出すにはどうすればよいかと頭を悩ませることになる。楽器の多様性ゆえ演奏上の苦労は大きい、異なる楽器の個性を楽しむこと、それによって音楽のさまざまな表現の可能性を感じさせてくれることが、オルガンの最大の魅力だろう。

オルガンの歴史 ——18世紀までの展開

「オルガン」の名は、ギリシャ語で「道具・器具」を意味する語「オルガノン」に由来する。既に紀元前3世紀頃のアレクサンドリアには、水圧でパイプに空気を送る水オルガンがあった。やがてふいごを使った送風の仕組みが開発され、ギリシャ各地やローマに伝わり、円形競技場や祝宴会場などで催しの始まりを告げる



水オルガン

合図として、また場を盛り上げる囃子（はやし）の楽器として使われた。キリスト教の弾圧時代には、殉教者を猛獣（おどろ）の檻へ追い込む際にオルガンの音が鳴らされたといわれ、この頃のキリスト教徒にとってオルガンは忌々しい邪教の楽器であったはずだ。以降9世紀頃までのオルガンは、贅沢（ぜいたく）品または権威の象徴として、主に華やかな宮廷の宴や葬礼の儀式で用いられた。

このようにもっぱら世俗の楽器であったオルガンが、10～13世紀のうちに、教会の楽器へと変貌する。なぜ、どのように起こったか、はっきりしたことは分かっていない。キリスト教が広まるにつれ、かつての迫害の記憶は薄れ、礼拝における一切の楽器の使用を禁じた初期キリスト教の考え方も変化していた。各地の修道院に付属学校が設立され、音楽教育の環境が整うに従って、聖歌隊の練習で音程を合わせるためにオルガンが用いられるようになり、それが徐々に教会での典礼にも取りこまれていったと考えら



聖バフオ教会のオルガン
（オランダ、ミューラー作、1738年）

れている。

15世紀までには現代に通じるオルガンの形がほぼ完成し、以降、国ごとに多様な発展をとげた。教会での重要度はいよいよ増し、会衆の歌唱を伴奏する他に、礼拝の前後に独奏曲を演奏するなど、礼拝の進行をリードする役割を果たすようになる。J. S. バッハの〈トッカータとフーガニ短調〉をはじめ、オルガン音楽の代名詞ともいべき数々の名曲が生み出された17～18世紀は、楽器の建造技術、音楽の内容ともに、まさにオルガンの黄金期であった。

教会からコンサートホールへ

オルガンが教会楽器として発展を続ける一方、17世紀の中頃から、世俗の施設でもオルガンを用いる動きが見え始める。これを先導したのは、清教徒革命によりオルガンが壊滅的被害を受けたイギリスである。オルガンをカトリックの象徴とみなした清教徒によって、多くの教会の楽器が壊されてしまったが、劇場やタヴァーン（宿泊施設付き酒場）、個人の邸宅などで難を逃れたオルガンは、歌や合奏の伴奏に重宝された。1730年代に入ると、コヴェントガーデン劇場ではヘンデルの弾くオルガン協奏曲が人気を博し、プレジャーガーデン（屋外娯楽場）などの娯楽施設でもオルガンを見ることが珍しくなくなっていた。現存する最古のコンサートホールと言われるオックスフォードのホーリーウェル音楽堂（1748年開館）にオルガンが入れられたのも、

ごく自然の成り行きだっただろう。

世俗施設での音楽祭や演奏会が地域社会に浸透し、その規模が大きくなるにつれ、大合唱にも負けない音量と、独奏楽器としての風格を持つ大オルガンが求められるようになる。1834年、バーミンガム公会堂に設置された4段鍵盤のオルガンは、このような時代の要求に応えるものだった。専属オルガニストによる演奏会が毎週開かれ、オペラや管弦楽のオルガン編曲を交えた演目が大衆の人気をさらった。各都市の経済発展を背景に、オルガンを備えた音楽ホールを持つことがある種のステイタスと見なされたこともあって、英語圏の国々を中心に、世俗施設でのオルガン建築は一気に勢いづく。市民向けの安価なオルガン演奏会は、時に2000人の観客を集めたというから、さながら現代のポップスターのライブコンサートである。ブルックナーやサン＝サーンスといった名オルガニストの客演は、とりわけ人々を熱狂させた。各地の名器を弾いて回る「コンサートオルガニスト」が現れるのもこの頃。ここ



バーミンガム公会堂、1845年

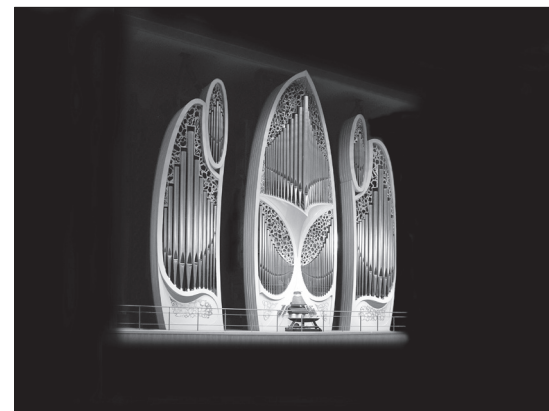


オルガンを弾くブルックナー

にオルガンは第二の黄金期を迎える。

コンサートオルガン

音楽専用ホールのためのオルガンは、伝統的オルガン音楽から現代曲まで、幅広い様式の音楽に対応できる「コンサートオルガン」として、より多彩な音色、よりダイナミックな強弱表現を求めて改良が重ねられてきた。独奏はもちろん、管弦楽との共演では、コンサートホールという会場ならではの音響の醍醐味を感じさせてくれる。サン＝サーンスの交響曲第3番〈オルガン付き〉、リヒャルト・シュトラウスの〈アルプス交響曲〉、エルガーのオラトリオ〈ゲロンティアスの夢〉、ホルストの組曲〈惑星〉、マーラーの交響曲第8番、レスピーギの交響詩〈ローマの松〉といった作品では、オーケストラの音に輝きと力強い低音、時には天上の世界を思わせる静謐な響きをも加えるオルガンの効果を、そしてジョン・デブプレ、ヒンデミット、プーラン



東京芸術劇場のオルガン（フランス、ガルニエ社製）
写真提供：東京芸術劇場

ク、ラングレ、バーバーなどのオルガン協奏曲では、オルガンと管弦楽の掛け合いが織りなす色彩豊かな音響特性を楽しむことができる。

日本各地の音楽ホールでオルガンが見られるようになって約半世紀、いかに活用していくかが課題と言われて久しいが、近年では、ランチタイムのワンコインコンサート、レクチャーや見学会、中には演奏が学べる市民向けオルガン教室など、気軽にオルガンに触れることのできる機会が増えてきた。いくつかのホールのオルガンの音色を意識して聴き比べたり、バックステージツアーに参加して楽器を間近で観察したりするのも楽しい。ぜひ、それぞれのオルガンの見た目の特徴から、演目や演奏者によって幾様にも変わる音色、会場ごとに異なる音の響き方にも注目して、現代の日本に息づく「楽器の王」の魅力を探訪してみたいかがだろう。

（はやさか まきこ・イギリス音楽史）

渡辺 和彦

(わたなべかずひこ・音楽評論家)

10月の読響は、《読響メトロポリタン・シリーズ》(8日、東京芸術劇場)、《定期演奏会》(9日、サントリーホール)と《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》(11日)の計3公演は桂冠名誉指揮者の巨匠**スクロヴァチェフスキ**指揮、そして《サントリーホール名曲シリーズ》(17日)と《東京芸術劇場マチネーシリーズ》(19日)、《気楽にクラシック～ヨーロッパ音楽紀行～》(23日、東京オペラシティ)の3公演は、1946年チェコ生まれの名指揮者**ペトル・ヴロンスキー**指揮で行われる。さらに《大阪定期》(28日、ザ・シンフォニーホール)と、特別公演《世界のマエストロシリーズ vol. 2》(30日、東京芸術劇場、公演情報は次ページ)には、同じチェコの巨匠でファンの多い**ラドミル・エリシュカ**(1931年生まれ)による公演が予定されている。

「**スクロヴァ**のブルックナー」、今回は演奏頻度の少ない第0番。番号付けも作曲者によるもので、ゼロ(ドイツ語では“ヌルテ”)と言いながら、曲の着手が現行の第1番と前後するというだけで、実際の完成は第1番よりも後になった。内容的にも習作ではあり得ない。実演が少ないのが不思議なほどの名作なので、大いに楽しみ。公演をハシゴして回るブルックナー・ファンが現れるかもしれない。ベートーヴェンの元氣な第7番との組み合わせも興味深い。

ヴロンスキーが読響の指揮台に立つのは今回が3度目。初共演は1987年で、次が2011年5月。今回は震災後、海外からのキャンセルが続く中での代役だったが、マーラーの交響曲第5番他を指揮して称讃された。チェコ・ブルノ市のヤナーチェク・フィルやブルノ国立劇場の指揮者として評価が高く、練習の厳しいことでも知られる。今回は前回に続いてマーラー、そしてドヴォルザーク、スーク、モーツァルトというチェコと強い関係のある音楽を披露する。マーラーはチェコ(ボヘミア)のユダヤ人社会の出身で、曲中にボヘミア民謡の断片が頻出することはあまり知られていない。

エリシュカはチェコの現役最高齢の指揮者。これまでもN響、札幌響、大阪フィル等に客演して、日本でも大ブレイク。今回は首都圏と関西圏でそれぞれ唯一の公演なので、〈新世界から〉を聴きたい人だけでなく、コアなオーケストラ音楽ファンが大勢押しかけるに違いない。

名曲の深層 聴き慣れた名曲にも、 思わぬ発見がある

第5回 サン＝サーンス／ 交響曲 第3番〈オルガン付き〉

佐伯 茂樹

この連載は、読響のコンサートで取り上げるオーケストラの名曲にスポットを当て、楽譜を読み込んだりエピソードを紹介したりして作品の深層に迫っていきます。今回取り上げるのは、9月20日の《第169回東京芸術劇場マチネーシリーズ》と21日の《第74回みなとみらいホリデー名曲シリーズ》で演奏するサン＝サーンスの交響曲第3番〈オルガン付き〉です。タイトルどおり、重厚なパイプオルガンが加わるこの交響曲の深層に踏みこんでみましょう。

サン＝サーンスは、幼いときから音楽の才能を発揮し、「モーツァルトの再来」とも呼ばれていました。彼が最初の交響曲（未完）を書いたのが16歳のとき、第1番を作曲したのが18歳（1853年）のときでした。24歳（1859年）になると、さらに交響曲第2番を作曲するのですが、その後しばらく交響曲には着手していません。〈オルガン付き〉と呼ばれて親しまれている第3番を作曲したのは、なんとその27年後の1886年。サン＝サーンスが51歳になってからでした。いったいどうしてサン＝サーンスは26年もの間、交響曲を作曲しなかったのでしょうか？ 実は、それは19世紀フランスの特殊な音楽事情が背景にあるのです。

バロック時代から古典派時代にかけてのフランスでは、ルイ14世が建造したヴェルサイユ宮殿でおこなわれる宴のために、華やかな音楽がたくさんつくられ

ました。他にも、コンセル・スピリチュエルという組織が持つ大編成のオーケストラで交響曲なども演奏されていたのですが、これらの行事は18世紀末に勃発したフランス革命によって終焉を迎えてしまいます。王侯貴族の贅沢な娯楽ですから当然でしょう。

19世紀になると、コンセル・スピリチュエルが復活して交響曲が演奏されるようになったものの、パリの音楽界全体では、革命後に台頭してきた市民階層のための歌劇や舞台が中心になり、交響曲は時代遅れの音楽としてあまり演奏されなくなってしまいました。ベルリオーズの交響曲が、〈幻想交響曲〉〈イタリアのハロルド〉〈ロメオとジュリエット〉と、次第に舞台向けの作品へと変貌し、後年は歌劇の創作が中心になったことを見ても、その流れは理解できます。

当時のフランス人にとって、「交響曲」

というジャンルは、（フランスから見て辺境だった）ドイツ人が作曲しているものであり、パリ高等音楽院の学生が習作として書く程度の曲という認識でした。サン＝サーンスの交響曲第1番も、初演のときは、自身の名前を伏せ、ドイツ人が作曲した作品ということで発表されたのです（ゴーストライター交響曲の元祖？）。

ちなみに、この交響曲第1番の楽器編成は面白く、なんと、第4楽章では、ピッコロ、バスクラリネット、ホルネット、ピストン・トランペット（それまでの楽章ではナチュラルトランペット）、トロンボーン、2種類のサクソルン（バスとコントラバス）、シンバル、4台のハープが加わり、それまでの楽章とは打って変わって盛大に盛り上がる形になっています。第1楽章では、ティンパニを2組（奏者も2人）使い、第3楽章ではハープ独奏を活躍させるなどしているのです、おそ

2 TROMPETTES en MI b.
à Cylindres.
2 CORNETS à Pistons en SI b.
1 SAXHORN Basse en SI b.
1 SAXHORN C. Basse en Mi b. (à 5 Cylindres).
1^{re} et 2^{me} TROMBONES.
3^{me} TROMBONE.
1^{re} et 2^{me} TIMBALES en MI b SI b.
2^{me} et 3^{me} TIMBALES en SI b SOL.
1 Paire de Cymbales.
4 HARPES.

譜例1 サン＝サーンス／交響曲第1番

スコアにおける楽器指定（部分）[上から：ピストン・トランペット2本、ホルネット2本、サクソルンバス、5ピストンのサクソルンコントラバス、トロンボーン1・2番、トロンボーン3番、ティンパニ1番、ティンパニ2番、シンバル、ハープ4台]



現代のサクソルンバス

らくベルリオーズの影響を受けたに違いありません。

実は、革命後のフランスの音楽界は、革命時に重要な役割を担った軍楽隊の隊員を養成するという側面を持ったパリ高等音楽院と密接な関係にありました。そのため、〈幻想交響曲〉のDes（変ニ）管ピッコロ、Es（変ホ）管クラリネット、オフィクレイドのように、管弦楽曲で軍楽隊用の楽器を使用することも多くあったようです。サン＝サーンスの交響曲第1番で使われているサクソルンもそうなのでしょう。サクソフォンの発明で知られるベルギーの楽器製作家アドルフ・サククスは、自身が開発した楽器をフランスの軍楽隊に納入していたので、ここで使用したのかもしれませんが。サン＝サーンスは、オラトリオ〈ノアの洪水〉では、サククスが発明した「6本ピストン付きトロンボーン」も指定しています。

しかし、次に作曲した交響曲第2番は、

1^{re} et 2^{me} Trombones.
3^e Trombone.
2 Trompettes à 6 pistons en FA.
2 Trombones à 6 pistons.

譜例2 サン＝サーンス／〈ノアの洪水〉

スコアにおける楽器指定（部分）[上から：トロンボーン1・2番、トロンボーン3番、6本ピストンのトランペット2本、6本ピストンのトロンボーン2本]



アドルフ・サックスが発明した6本ピストンの
トロンボーン（浜松市楽器博物館所蔵）

トロンボーンや軍楽隊楽器を含まない古典的な編成になっており、その後は交響曲から遠ざかっていたのですが、1871年になると、サン＝サーンスのそうした姿勢を揺るがすような重大な出来事が起きました。そう、ナポレオン三世率いるフランス軍が、普仏戦争でプロイセンに敗北してしまったのです。

祖国を愛する気持ちの強かったサン＝サーンスを中心としたフランスの作曲家たちは、敗戦のわずか1か月後に、フランス音楽を広めるための「国民音楽協会」を設立。自らの国の音楽について顧みるようになりました。彼らは、フランスならではの音楽の確立に目覚める一方で、ワーグナーをはじめとするドイツ音楽に対して憧憬しょうけいの念も抱くようになったのです。

この流れの一つとして、それまでフランス人が軽んじてきた「交響曲」に目を向けるという動きもありました。特に、保守的な考え方を持っていたサン＝サーンスの心の中にその念が強く生じていたことは間違いないでしょう。でも、フランスでは、サン＝サーンスは時代遅れの作曲家として捉えられ人気は衰えていたので、理想を実現する機会はありません

でした。

そのような状況下で、イギリスのロンドン・フィルハーモニック協会の依頼で作曲されたのが交響曲第3番なのです。循環主題を使用して全体の統一を図ること、19世紀フランスで発達したシンフォニ

ックオルガンと管弦楽を融合させることなど、フランス人の手による新機軸の交響曲を生み出したというサン＝サーンスの想いと技能の総決算の曲といいいでしょう。

この曲の中で、ヴァルヴトランペットとナチュラルトランペットの併用、サクソソンの発展型であるフランス型チューバの使用など、交響曲第1番で試みた楽器用法が結実している点も見逃すわけにはいきません。プロテスタントが多いプロイセンに対抗するために、オルガンとトロンボーンというカトリックならではの楽器を活躍させたのもサン＝サーンスならではの考えなのかもしれません。ぜひそういった点に注目して鑑賞してみてください。（さえきしげき・音楽ライター／古楽器奏者）

2 Trompettes en FA

1 Trompette (naturelle) en UT

1^{re} et 2^e Trombones

3^e Trombone et Tuba

3 Timbales

Triangle

Cymbales et Grosse Caisse

Orgue

Piano

譜例3 サン＝サーンス／交響曲第3番 スコアにおける楽器指定（部分）[上から：トランペット2本、ナチュラルトランペット、トロンボーン1・2番、トロンボーン3番とチューバ、ティンパニ3台、トライアングル、シンバルと太鼓、オルガン、ピアノ]